

古今和歌集卷第十五

惠乎

五條后
詩煩

ふ奈のきまらぬのしれはよきも
人みらばあてのいかりけを

國後
か一七
貞觀十
三年九
月廿日
明年
六月廿
六日

む月のさきあはらむいかりく
みけりあはらむいかりく

あとのさきあはらむいかりく

月乃たりあはらむいかりく

うのしれはよきも
正てあはらむいかりく

大徳
元年

よめる

在原業平朝

月やのしれはよきも

わらわのしれはよきも

題

これきまわれ

こ きん わ か しゅう か ろく ほん
古今和歌集 嘉禄本

鎌倉時代末期写 20 卷 2 冊

縦 25.2 cm 横 16.3 cm

天皇または院の勅命ちうめいによって撰集される勅撰和歌集、それは平安前期から室町時代まで行われ、計二十一回を数えた。各時代を代表する歌人が撰者となり、我が国の文学の中心的な撰集である。その最初のものが『古今和歌集』。

「古」は『万葉集』以来の古い歌、「今」は現代（その当時）の歌の意で、およそ百五十年間の千百首余りの歌を集めている。延喜五年（九〇五）醍醐だいてい帝の命によって紀友則・紀貫之等四人の撰者によって編纂へんさんされ、それ以後、日本人の情趣の源郷げんきやうとして後世に大きな影響を与えていった。

『古今集』が編纂されて五十年ほど後、村上帝に寵愛ちゆうあいされた女御芳子むすめほこうしは黒髪が豊かで美しく、そして『古今集』二十卷の全ての歌を暗誦していることで名高かった。芳子の父は女性の教養として、手習い・琴と共に『古今集』全ての和歌の暗誦をその教育方針としたことが、当時の『枕草子』『大鏡』によって伝えられている。その頃にはもう既に『古今集』が必須の教養となっていたことがよく分かるエピソードである。

この様な『古今集』は古典文学作品の中でも古写本を最も多く伝えており、本館にも

十点をこす鎌倉時代の古写本を所蔵する。その中で本書嘉禄かろく本は藤原定家を祖とする和歌の冷泉家れいぜんけに用いられた本文を伝えているものである。掲出の箇所は、六歌仙の一人、「伊勢物語」の主人公でもある在原業平ありはらなりひらの恋歌「月やあらぬはるやむかしのはるならぬわが身ひとつハもの身にして」。



小野小町
「三十六歌仙」より

在原業平
より

（天理図書館 岡高偉久子）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>
 平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）
 ただし7月20日、31日は休み
 （本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）